大学等名 富山県立大学

自己点検・評価について

① プログラムの自己点検・評価を行う体制（委員会・組織等）

教務委員会（全学）

（責任者名）中島　範行　　（役職名）教務委員会（全学）委員長

② 自己点検・評価体制における意見等

自己点検・評価の視点	自己点検・評価体制における意見・結果・改善に向けた取組等
学内からの視点	
プログラムの履修・修得状況	令和6年度より「データサイエンスリテラシー」を全学部の1年生必修科目として開講している。令和7年度は1年次生540名全員が本教育プログラムの科目を履修し、修得率は約95%であり、ほぼ全ての学生が修得している状況である。 令和6年度に未修得であった学生に対しては再履修クラスを設け、令和6年度1年次生の修得率は96.4%から約98.5%に上昇した。
学修成果	本教育プログラム（データサイエンスリテラシー科目）受講者全員に対して実施している授業アンケートを分析することによって、学生の理解度を把握している。アンケート結果については次の項目に記載のとおり。 また、アンケート結果を全学科、データサイエンスリテラシー科目ワーキンググループ、教務委員会（全学）と共有し、内容や対応などの改善について授業の振り返りを実施しており、教員、学生双方の視点から学修成果を分析することで、本教育プログラムの評価・改善に活用している。
学生アンケート等を通じた学生の内容の理解度	本教育プログラム（データサイエンスリテラシー科目）受講者に対して実施した授業アンケートのうち、理解度の目安に関する設問では、86.61%の学生が「よく理解できた」または「ある程度理解できた」と回答していることから、各学科の専門性の都合上、学科ごとの理解度には多少の差はあるものの、全体として一定程度の理解は得られたものと評価できる。
学生アンケート等を通じた後輩等他の学生への推奨度	本教育プログラム（データサイエンスリテラシー科目）受講者に対して実施した授業アンケートのうち、興味の度合いに関する設問「授業科目に関連する分野について興味がわきましたか」という問に対し、興味がわいたと回答をした学生は全体の77.7%であった。昨年度の74.84%から上昇していることからも、データサイエンス分野への興味・関心については学科を問わず多くの学生から一定程度の好評を得たと考えられ、今後、後輩等への評判を通じた興味・関心の高まりも期待できる。
全学的な履修者数、履修率向上に向けた計画の達成・進捗状況	前述のとおり、令和6年度より「データサイエンスリテラシー」を全学部の1年生必修科目として開講している。令和7年度は1年次生540名全員が本教育プログラムの科目を履修し、修得率は約95%であり、ほぼ全ての学生が修得している状況である。 令和6年度に未修得であった学生に対しては再履修クラスを設け、令和6年度1年次生の修得率は96.4%から約98.5%に上昇した。引き続き再履修によって修得率をあげていくことで、令和10年度には、全学生の履修率及び卒業時のデータサイエンスリテラシーレベルの修得率が100%となる。
学外からの視点	
教育プログラム修了者の進路、活躍状況、企業等の評価	本教育プログラムは令和6年度より導入しているため、修了者の評価は令和10年度以降に可能となる。学生のキャリア形成を支援する富山県立大学キャリアセンターと連携し、本学の卒業生に係る進路状況を把握しているため、本教育プログラムの修了者が出た後は、進路等の把握・分析をすることができると考えている。
産業界からの視点を含めた教育プログラム内容・手法等への意見	本学では、県内企業が会員となり、産学連携を推進している「富山県立大学研究協力会」や、DX推進を目的とし県内企業等が会員となる「富山県立大学DX教育研究センターアソシエイト会員」制度を設けており、企業の意見を伺う機会が多くある。また、情報工学部データサイエンス学科では、産業界（公益財団法人 環日本海環境協力センター(NPEC)）から講師を招いて行う連携授業を実施しており、より実践的で効果的な内容となるよう工夫のうえ実施した。
数理・データサイエンス・AIを「学ぶ楽しさ」「学ぶことの意義」を理解させること	授業アンケート設問『授業科目に関連する分野について、自ら進んで調べる意欲や自主的に学習する意欲が高まりましたか。』について、「かなり高まった」、「ある程度高まった」と回答した学生が全体の約67%であり、昨年度の約62%から上昇していることから、「学ぶ楽しさ」「学ぶことの意義」を理解させるという観点において一定程度の効果を得られたと評価できる。来年度に向けて、この比率が更に高まるような改善を検討する。 ワーキンググループでは、授業の振り返りを踏まえ、学生の属する学科における独自のデータサイエンスリテラシーの重要性を講義の中に盛り込む、講義の中でより興味深い話題を提供して学生の興味に結び付けるなど、より「学ぶ楽しさ」「学ぶことの意義」を理解させられるような改善を検討・実施している。
内容・水準を維持・向上しつつ、より「分かりやすい」授業とすること ※社会の変化や生成AI等の技術の発展を踏まえて教育内容を継続的に見直すなど、より教育効果の高まる授業内容・方法とするための取組や仕組みについても該当があれば記載	授業アンケート設問『授業科目の内容は理解できましたか。』について、「あまり理解できなかった」、「ほとんど理解できなかった」と回答した学生が全体の約13.4%いたが、昨年度の約23%からかなり減少していることから、要因の分析と、その分析結果を踏まえた、より「分かりやすい」授業となるような改善が効果的に行えていると評価できる。今後も更なる改善を検討する。 ワーキンググループでは、授業の振り返りを踏まえ、動画での授業とPowerPoint等を使った通常授業の比率を見直す、小テストで正答率の低かった内容については次の講義の冒頭で再度解説を行う、受講生がより円滑に修学できるようTAを増やすなど、講義の内容や水準を維持・向上しつつ、より「分かりやすい」授業とするための改善を検討・実施している。